

鳳書
OHNORI SEIRA

病室で敏感な
花を艶られ
性感触診

花子

花子！

病室に戻ると
花子の様子が
違っていた

青ざめた
花びらが
震えていた

智也さん…

助けて…

どうしたの？

何か
あったの!?

あの人が…

怖い…

抱きしめて



わたしを
放さないで
強くつかまえて

何かに
怯えたような
花子は

花子

薄い寝巻きの下の
豊かなふくらみを
思い切り
押しつけてきた

親父に退院を
迫られて

逆に火の点いた
情熱に
油が注がれた

ああ
絶対に
手放さないよ



あ……
あ……あ

柔かな胸

細いうなじ

薄い花びらの
ような肌は
男の愛撫に
妖艶なピンクに
染まっていった

きれいだ

ああ

こんなに
美しい花びらは
初めてだ

花子

あ…

智也さん…ん

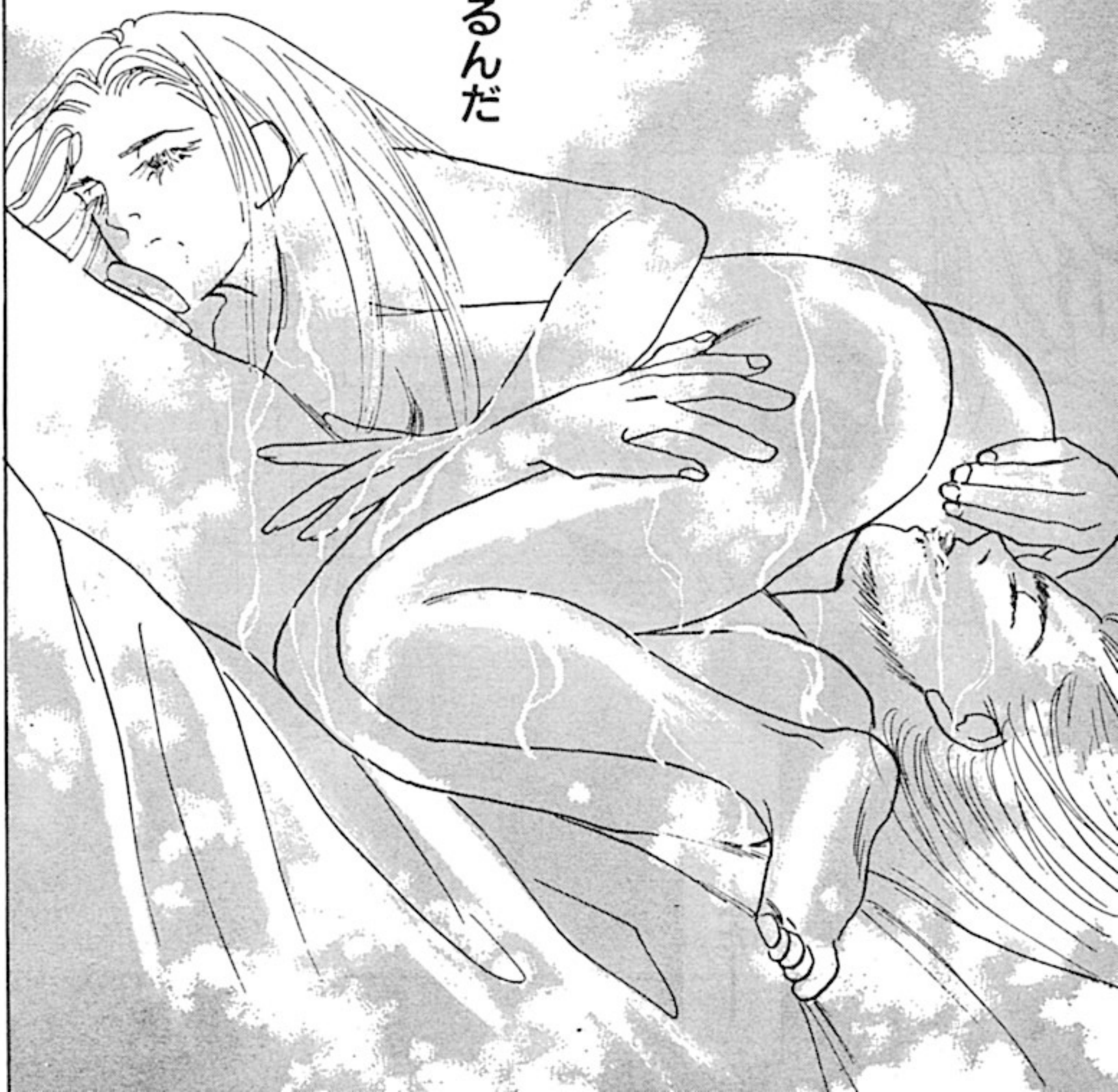
花子の芯まで
吸い取って
しまいたかった

あ…

ああ…

彼女もまた—

ああ
ふたりは求め合っているんだ





ごっごめん
病みあがり
なのに
乱暴だった？



ううん
ちがうの



嬉しくて…
こんなの…
初めて…



お願い
キスして
入れたまま
抱きしめて
入れたまま

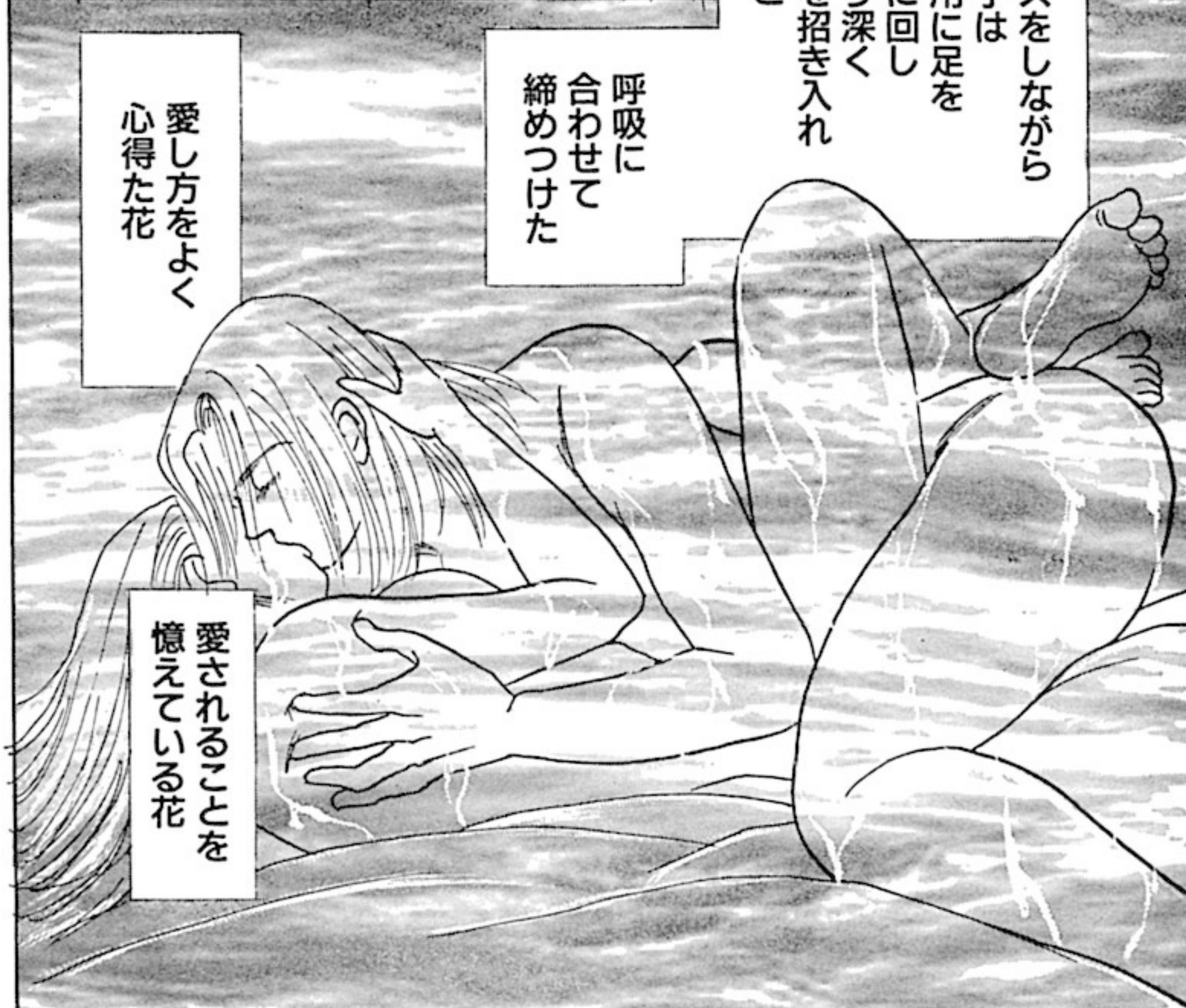


花子

キスをしながら
花子は
器用に足を
腰に回し
より深く
男を招き入れ
ると

呼吸に
合わせて
締めつけた

愛し方をよく
心得た花



愛されることを
憶えている花

ああ
すごいよ花子

好きよ

智也さん

あなただけ

ヌルヌルして
気持ちいい

…出そうだ

それから

花子の蜜で
ドロドロになって

ふたりは
奥深いところで
結ばれた